

新型コロナウイルス感染症に 関わる研究から考える未来

—社会共生価値を創造する

次世代研究大学の実現に向けて—

野口 義文

立命館大学 研究部事務部長
産学官連携戦略本部副本部長

はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大によって立命館大学における研究活動は、大学院生や学部生が関与する研究室への立ち入り制限をはじめとするさまざまな感染防止対策を実施する中であって研究活動をどう維持していくのか、そして研究者においては研究活動、われわれ立命館大学研究部の職員においては研究支援活動を、感染防止とどのような

に両立させるのか重要かつ厳しい判断を強いられる状況が続いた。

われわれ研究部では、研究費に関わる各種申請手続きを年度当初からWeb申請に切り替え、ウェビナー等の開催に係る運営各社のサービス内容を一覧にして情報提供するなど、さまざまな対応を進めてきた。また、新型コロナウイルスの影響が長引く中、本学がこれまで目指してきた新たな共生社会に向けての価値創造研究を進めるに当たっては、今回のCOVID-19感染が拡大している今、そしてその後の社会(Withコロナ/Afterコロナ社会)を見据えた、これまでとは異なる価値観の下、全学の多種多様な英知をもって研究を推進し、社会貢献していくことが求められていくと判断し、そのことを具現化するための施策として、「Withコロナ社会 提案公募研究プログラム^{※1}—Visionaries for the New Normal—」の募集を行い、全学からさまざまな研究やアイデアを募ることとした。前段は、このプログラムについての取り組みやその内容等について、後段は、コロナ禍において果敢に取り組み、2030年までの本学の社会的使命やそのありようを示した「学園ビジョンR2030立命館大学チャレンジ・デザイン」を紹介する。

「前段」

「Withコロナ社会提案公募研究プログラム」の取り組み

1 「Withコロナ社会提案公募研究プログラム」の狙い

本学は16学部20研究科を持つ総合大学であり、コロナ禍以前から長きにわたり自然科学・人文科学・社会科学の各研究分野における発展に加えて研究者の多様性を生かす研究拠点の創成を推進してきた。そして、世界が直面する少子高齢化などの社会問題やSDGsにおける環境問題などの先端フィールドとも言える日本において、学長がリーダーシップを発揮し、けん引する2つの研究機構^{※2}が実施する「R-GIRO研究プログラム」^{※3}や「アジア・日本研究推進プログラム」^{※4}等の施策によって新しい価値を創造する挑戦的かつ独創的な知の創造拠点の創成を目指してきた実績がある。

一方で、2020年に発生したCOVID-19の感染拡大はこれまでの社会活動や経済活動、生活様式を覆すほどの大きな影響を教育・研究現場にまでもたらし、国内外の社

会全体に与える影響の長期化は避けられない状況となっている。また世界においては、COVID-19の感染予防のための行動制限から働き方、バリューチェーン、サービスに対するニーズやその提供の在り方、テクノロジー等が大きく変化をしていった。われわれ研究部においても、製薬・ライフサイエンス系企業や一部の大学においては治療薬やワクチンの研究開発に向けたプロジェクトの発足、始動といったニュースが連日流れている中、新しい社会価値創造に向けて、本学もこれまでの実績や多様性を生かした取り組みを進めていこうという議論を活発に行った。そして、そのことを研究プログラムという形として実施する考えに至った。

本学においてコロナ社会に向けた研究プログラムを検討する際に大切にしたい事は、コロナ禍によって社会全体に閉塞感が漂う中で本プログラムを通じて研究者の自由な発想に基づく知の探究を後押ししたいという点であった。つまり、俗にいう政策誘導型やテーマ設定型ではなく、多方向にわたる多様性重視型という考え方である。よって、新型コロナウイルスに対応する新薬開発や感染防止策に限らず、感染者に対する差別や偏見、また感染症対策に関する科学コミュニケーションやガバナンスの在り方、関連する環境問題や及ぼ

す影響、コロナ禍における生活様式の変化などについても幅広く学内から研究に資する提案の募集を行う内容とした。

提案内容における研究スタイルも、感染症に関する調査研究からWithコロナ社会形成に向けたさまざまな個々の研究アイデア、クロスフィールド研究に至るまで、多様な研究スタイルの提案を受け入れ、支援することにした。

また審査区分もこれまで本学では慣例的に自然科学系分野、人文社会科学系分野に分かれて審査会を設置し行ってきたが、このプログラムでは初めて学際分野の審査会を設置し、自然科学系と人文社会科学系の両方の審査委員が審査に関わる方式を採用した。こうして、多様な研究者から多くの申請があることを期待して、前述でも触れたように感染症の感染防止対策から、文化・経済・倫理規範等社会に与える影響まで、Withコロナ社会における課題解決、価値創造に貢献する多様な研究提案の募集が実現した。

● プログラム募集要領における具体的な研究例

- ・ 感染症の予防／治療につながる医薬品や機器装置、対策等の調査研究
- ・ 人々の生活様式や心理の変化に関する研究

- ・ 観光、イベント、芸術活動等の諸文化活動に関する研究
- ・ 経済的諸課題に関する研究

- ・ 倫理的／法的／社会的課題(Ethical, Legal and Social Issues)に資する研究

- ・ 新型コロナウイルスや新型肺炎に関する言説や科学コミュニケーション等の研究 他

● 「Withコロナ社会 提案公募研究プログラム

—Visionaries for the New Normal—」の概要

募集内容：新型コロナウイルス感染症に関する調査研究からWithコロナ社会形成に向け
たさまざまな基礎研究や応用研究

募集期間：2020年6月29日(月)～7月22日(水)

募集対象：立命館大学に所属する研究者

研究期間：2020年9月～2021年3月

助成額：総額2000万円(1件50～200万円)

2 「Withコロナ社会 提案公募研究プログラム」の採択と始動

「Withコロナ社会 提案公募研究プログラム」の募集

は、どこからでも対応可能なWeb申請方式で全学から多様な職種の研究者を対象に行い、われわれが予想した以上の申請件数を得ることができた。申請件数は実に81件、当初予算を勘案すると、寄せられた提案の中から約10件しか採択できないことになった。

このように多数の提案があった一つの要因としては、タイムリーなトピックに対して幅広い分野からの申請やWeb申請方式を可能としたことが考えられる一方で、実は研究部においては、研究者の多くは学部・研究科所属の教員であり、コロナ禍におけるZoom等を使用した授業の準備等にエフォートを割かざるを得ない状況、かつ研究活動に制限がある中では、研究者の研究意欲がそがれていることを危惧していた。しかし、ふたを開けてみるとこれだけ多くの応募があり、大変意欲的な申請も多数あった。この結果を受けて、われわれはコロナ禍においても研究者の潜在的な研究意欲が非常に高いことに安堵するとともに、いま一度研究者の研究活動を阻害している要因について、しっかりとヒアリングをして、解決できるものはすぐ対応していかなければならないと再認識した。研究支援の在り方やそのアプローチの方法について考えさせられるプログラムであった。

さて、本プログラムの採択についてであるが、当初予算としては2000万円を設定しており、この金額を上限に審査を進めてきた。しかし、コロナ禍の影響によりわれわれ研究部で実施している既存の研究推進プログラムの中でもとりわけ研究成果の国際発信に関連するプログラムの予算執行率が低く推移していたことから、こちらの予算を上乗せすることを判断し、最終的には21件（研究助成総額・3300万円）を採択することとした。この判断も各種研究推進プログラムを一元化してまとめている研究部のワンストップ体制と研究部スタッフによる分析・評価の迅速性がうまく機能したものと考えている。

さて、採択されたプログラムの内訳は自然科学系分野で5件、人文社会科学系分野で11件、学際分野で5件となった。本誌面の関係上、全ての採択プログラムを紹介することはできないが、いくつか研究内容を紹介する。

● 自然科学分野／

情報理工学部教授 加藤ジェーン

交通機関、店舗、役所の窓口など、人々が集まりやすい場所の混雑具合に関する情報を、Web等を利用して

実時間に提供し、混雑回避に努めることが、Withコロナ時代の切実なニーズとなっている。本研究では、個人情報（顔等）を特定できない低解像度の監視カメラ画像を基に、群衆の属性（人数や密度）と個人の属性（年齢層、性別、職業）を実時間に推定する技術を開発する。

● 人文社会科学分野／

先端総合学術研究科講師 後藤基行

COVID-19による深刻な社会問題の一つに、罹患当事者・関係者に対する差別・バッシング・ハラズメントが広範に行われていることがある。本研究では、この実態を明らかにするため当事者・関係者にインタビューや質問紙調査を行い、その上で過去の類似事例との歴史的な比較考察を行う。また、これらの記録を後世に残して将来への教訓とするため、資料のアーカイビングにも取り組む。

● 学際分野／

情報理工学部教授 西浦敬信

飛沫拡散の少ない非可聴つぶやき声を検出可能な皮膚

立命館大学 研究高度化中期計画の概要について



密着型マイクロホンを開発し、AI技術を使って明瞭性の高い通常声に復元することで、飛沫と騒音の拡散防止を両立可能な新しい生活様式に適したオンライン会

議環境構築を支援する。また、将来的には健常者だけでなく声帯発声が困難な方の声の復元への貢献も視野に入れる。

本プログラムから生まれた研究成果については、ホームページや大学広報誌への掲載、学内外シンポジウムの開催等、積極的に公開の上、社会に発信していく予定である。また、次年度においても継続実施を積極的に検討しているところでもある。

「後段」

「学園ビジョンR2030」

立命館大学チャレンジ・デザイン」の取り組み

本学はこれまでも世界や社会の情勢、大学を取り巻く環境やその変化をいち早く捉え、呼应や対応をしていく発信を実践してきた。今次、2030年に向けて、コロナ禍も含めた、急激に変化する予測困難なこれからの社会において、未来のあるべき大学の姿を積極的に提起・発信し、その実現に挑戦していくことにより、平和で希望に満ちた未来社

会を実現することのできる学園になることを目標として、「学園ビジョンR2030立命館大学チャレンジ・デザイン」を策定した。

その骨格は、2つの柱、3つの重点目標、克服すべき課題からなっている。まず、2つの柱であるが、1つ目の柱が「次世代研究大学の実現」であり、さまざまな学園構成員が躍動する中で、研究と教育が相乗効果を発揮し、社会共生価値創出と存分に活躍できる「場」としての知的生産拠点となることである。2つ目の柱が「イノベーション・創発性人材の創出」であり、革新魂を持ち、社会を変えるような発信ができる人材を次世代研究大学の実現を通じて輩出することである。

その柱構築のための重点目標として①社会共有知創造、②学びの価値提供、③自己変革する組織の3つを据えている。これら重点目標を達成するために克服すべき課題としても、DXなど多様化する学習者対応や新たな教育展開、オープン・イノベーション推進、価値創出する組織改革の実践などがあり、俗に言う「絵に描いた餅」にならないように、課題克服へ向けた具体的な実践施策を検討するための部会を設置し、次年度よりそれら具体策を実施すべく、教員、

職員、特に若手を選抜して教職協働で旺盛な議論を展開している。

その部会は、8つの部会から構成されており、名称は次の通りである。第1部会「次世代研究大学・Knowledge Nodes構想検討部会」、第2部会「理系教育研究のあり方検討部会」、第3部会「アート・デザイン系教学検討部会」、第4部会「大学院・学部教学の高度化検討部会」、第5部会「新たなグローバル化検討部会」、第6部会「社会人教育具体化検討部会」、第7部会「新たな学習支援・学生支援のあり方検討部会」、第8部会「SDGs創発・見える化プラットフォーム検討部会」である。特に第1部会は、われわれ研究部としても、次世代研究大学の核心に当たる、広く開かれた立命館らしい知の共創と共有の場である Ritsumeikan Knowledge Nodes構想を構成する施策を具体化することから重点関与している。本学の研究の重点分野の検討、若手・中核研究者の育成、国際的な研究ネットワークの形成、産学連携・地域社会連携の高度化、収入政策などの課題設定があり、多様な部会メンバーとともに課題克服と具体的施策の実現を目指して鋭意取り組んでいるところである。

学園ビジョンR2030概念図

学園ビジョンR2030の学園像・人間像



学園像	人間像
学び続ける社会の拠点としての学園 <small>自分のライフステージに合わせて、必要なことをいつでも、自分に適した形で学び、新たな挑戦の力を育むことのできる「人生の道場(校)地」としての学園</small>	チャレンジ精神に満ちた人間 <small>困難や失敗を恐れず、困難を乗り越え果敢に乗り進める強い意志と胆識を備えた人</small>
人類社会における様々な課題に挑む学園 <small>世の中の様々なレベルや規模で存在する課題を見出し、その解決に挑戦する学園</small>	社会の変化に対応し、自ら考え、行動する人間 <small>社会の変化をつかみ、様々な課題を認識する洞察力を鍛え、課題解決への一歩を踏み出す人</small>
ダイバーシティ&インクルージョンを実現する学園 <small>個人、年齢、地域、国、宗教、風習、文化、世代をはじめとする社会のあらゆる多様性を価値とし、個人の意見や考え方の違いを理解・尊重し、他者と協働しながら多様な「つながり」を育む学園</small>	グローバル・シチズンシップを備えた人間 <small>自分がグローバル社会の一員であることを自覚し、他者の立場と意見を尊重し、調和のとれた解を導き出すことにより、多文化共生社会の実現に貢献する人</small>

おわりに

「ピンチはチャンス」、言い古された言葉ではあるが、コロナ禍において未来を考えるに非常にキーになる言葉であり、言い換えれば「発想を転換し、新たな価値を創造するのは今である」と言える。また研究の未来を考えるに、重要なことは2つあると考えている。1つは、従来の考え方を打破する意識改革を、意識する、ということである。常にアンテナを張り、改革することを、意識する、気を持ちようが重要である。、意志あるところに道は開ける、を实践させたい。次に、身近な体験や経験を重視することも大事ではあるが、もっと視野角を広げ、国内外の有識他者や歴史に学ぶ、なぜそうなったのかの根本を知る姿勢がコロナ禍の今重要と考える。そこに改革の兆しのヒントもあると思う。

最後に、本稿サブタイトルにある「—社会共生価値を創造する次世代研究大学—」であるが、後段で紹介した「学園ビジョンR2030立命館大学チャレンジ・デザイン」のように全学で考え方を一致させた政策策定プロセスはとても重要であり、とりわけコロナ禍の今、さまざまな先行きが混沌としている渦中において、全学でベクトルを合わせて邁進

する駆動力ともなっている。その重要な柱に、次世代研究大学の実現を置いている。私なりの強い思いに、単に研究高度化重視や大学院重視のみならず、さまざまな社会に貢献できる価値を、研究を通じて生み出し、そしてそのような貢献できる人材を輩出するのが本学の使命であるという決意がある。このような精神でもって、研究を通じての未来を今後も全学で考えていきたい。

※1 Withコロナ社会 提案公募研究プログラム

<http://www.ritsumei.ac.jp/research/member/corona/>

※2 学長が機構長の2つの研究機構

立命館グローバル・イノベーション研究機構 (R-GIRO)

<http://www.ritsumei.ac.jp/rgiro/>

立命館アジア・日本研究機構

<http://www.ritsumei.ac.jp/research/aji/>

※3 R-GIRO研究プログラム

<http://www.ritsumei.ac.jp/rgiro/activity/program/>

[third/projects/index.html/](http://www.ritsumei.ac.jp/rgiro/activity/third/projects/index.html/)

※4 アジア・日本研究推進プログラム

<http://www.ritsumei.ac.jp/research/aji/research/>